

三河アララギ

2019年7月 文月 ふみづき

七 月 号

第 六 十 六 卷 第 七 号



ニューヨーク日記(153) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NUR

Blue Shoe Diaries



気になっていたレストラン Nur やっと行けた! 予想どおりに美味しかった〜メニューは中東の料理。この茄子のカルパッチョ、見た目はもちろんインスタ映えしてるけど味の方も面白い。他にももう名物になっているセサミーのベーグル、イズラエル式でいつものNYベーグルとは違う。でも一番驚いたのはラム肉料理に付いてきたクスクスが! 今まで食べてきたクスクスは一体何だったのかと思うくらい違った。ふわふわでデリケート。実は作るのに結構手間がかかるらしい。

Bright colors and great contrasting flavors and textures all around. Exciting food at Nur. The eggplant carpaccio is a must, and not just because it looks stunning. There's so much depth of flavor. Everyone orders the sesame bagel to start and for good reason. Panipuri wakes up your tastebuds. Lamb chops cooked perfectly and that house made couscous makes you realize you never had couscous until now. It's so fluffy and delicate.

表紙・ホタルブクロ	今泉 由利 (1)	牧原 正枝 (24)	森岡 陽子 (33)
ニューヨーク日記 (153)	Blue Shoe (2)	石田 文子 (24)	松本 周二 (34)
アカンサスの徑	御津 磯夫 (4)	森 厚子 (25)	田中 清秀 (34)
ははきくさII	大須賀寿恵 (5)	山崎 俊子 (25)	今泉 由利 (34)
歌集『續草々』	今泉 米子 (6)	三田美奈子 (25)	植村 公女 (35)
はゝきくさII	河原 静誠 (7)	水野 絹子 (25)	今泉 如雲 (35)
風巻	岡本八千代 (8)	牧原 規恵 (25)	田中 清秀 (36)
深きえにし	弓谷 久子 (10)	現代学生百人一首	かさね吟行会
日本の漢字	今泉 由利 (12)	東洋大学	『酔いの徒然』 (87)
葱坊主	安藤 和代 (14)	三木 秀真 (26)	楽しい時間 (80)
シルバーカー	清澤 範子 (15)	三好 玄人 (26)	絹の話 (104)
虚しさ	伊藤 忠男 (16)	大田 心 (26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
白く輝き	矢崎 直人 (17)	高田 崑山 (26)	『江上浩二の独り言』
ひわ色を	森岡 陽子 (18)	松岡 美里 (27)	漢詩研修 (三十三)
お食い初め	白井 信昭 (19)	浦 祐誠 (27)	奥の細道 奥州へ
寡黙なれども	杉浦恵美子 (20)	田川 千晴 (27)	夏きたるらし
いつもの暮らし	山口千恵子 (21)	安井 七星 (27)	『水魚』のことから (222)
語源	阿部 淑子 (22)	森岡 陽子 (28)	岡本八千代 (57)
ねむり	夏目 勝弘 (23)	高橋 育郎 (30)	編集室だより (二〇一九年五月)
『ことよせ』	いーはとぶ	浜田 紀政 (32)	今泉 由利 (58)
		柳田 皓一 (32)	野菜・まんだら (17)
		重野 善恵 (32)	『三河アララギ』について
		山迫 京子 (33)	(60)
		山元 正規 (33)	

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

植ゑおきし山藍は鉢の大小によりて葉のいろに濃き淡きあり

堤防に待宵の花しばみつつ沙洲なき川をけふは超えたり

みちのくの山のやどりのかたみ草夏草たけし中に没しぬ

先だちてまた連れられて来たるたび迷ひおなじ南青山

行き過ぎて右へ曲るをあやまてば三度も曲る青山精神科の角^{かど}

繁りつつ青き珠の實見えながら胡桃の影は道を覆へる

わが庭に移してしげる本草らを言ひたりいひたまふ時を惜しみて

君がへにひとときありて立ち出づる垣の大明竹花に枯れたる

われもはや老いては心弱りつつ年を恐るることいひあへり

ははきくさII

大須賀寿恵

献立カード作成委員の事務を残し御用納めの式に出でゆく

汴野橋渡れば海苔の匂ひして海苔ゆり洗ふ人等群れ居り

煤払ひもせず正月を三度迎ふスモン病になりし年より

年末休暇となりて臥しをり吾が庭に子等の干したる海苔乾く音

床の中に足すり合わせ左足の今朝も利かぬをたしかめてゐる

二百五十板の献立カード見終へつつ元旦の一日暮れゆきたり

栄養士の作りし献立カード幾枚をわが訂しゆく幾ところをも

孵りたる金魚は鉢のふちにならびくろく透りていまだ動かず

配置転換の面接続きて痛む腰撫でつつ終車の時間見ている

かけ声して床より我は起き上る今朝の寒さに足のしびれて

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

大文字の跡見ゆる山ちかくして加茂川堤を車してゆく

洛北へ行きてかへりぬ中庭の私だけの無患子黄葉

植ゑしことなきもの生ふる屋敷森楠の木そびゆ篁の上に

丸々とせる平假名のエメール幼二人はスペイン語育ち

夏休み終へてブエノスアイレスへ今年はおそしまんさくの花

清瀧川越えて幾曲り山の上の神護寺は高き石段の上

白沙の箒目畏れつつ踏みて沙羅の木いづこ浄土院の廟

赤彦とともに沙羅の木を仰ぎ見し記憶にわれを夫は導く

岡先生の駕籠に従ひ坂木よりのぼりこしことも幾度ききし

一隅を照らす人こそ國寶と人ら遊べりかはらけを投げて

はつきくさⅡ

河原静誠

屋根の上に石をおきたる低き家稀れに見え来て乗鞍近し

白樺の枯木の見ゆる谷を越え這ひ松ひろぐる頂上に着きぬ

白樺もたちまち見えぬ雲湧きて吾が目の前にいかづちの鳴る

峰々に雷とどろきて乗鞍のお花畠に降り来たる電

手にしたる絵葉書とくらべ乗鞍のお花畠に黒百合さがす

幼な等と名札を立てぬ垣の辺に植ゑて萌え出づる花々の芽に

独り居の雑草茂る縁近く今年植ゑたる白百合の咲く

園庭に植ゑしダリヤに初咲きの赤き花咲く雨降る今朝を

軒先のカンナの花にやどりをり雨蛙一つ黄色になりて

砌り近くダチュラは白く垂りて咲く雨の少き夏を嘆くに

風^し 卷^{まき}

蒲郡 岡本八千代

いづくにか風卷吹き去り今朝はまた東^{ひんがし}よりの新しき光

流れゆく日々^{ひび}とは言へど今もなほ君との縁^{えにし}果てしなきかな

老いぬれば常ほほゑみて柔^{やは}らかき心になりたし今宵もおもふ

夕暮れてまたしほしほと寂しげに亀石小さきに腰下ろすなり

西空はしばしだんだらのオレンジ色その中にわれ包まれてゐる

われにある令和の日々の流れゆくどまることの嗚呼無かるべし

草々のみどりばかりのその中に紅^{くれなゐ}のバラ一つ咲^そき初めり

くれなゐの薔薇一つ咲きて思ふかな東京と豊明の娘二人を

常々に強がりの母われなれどなぜか今夜はしみじみとして

本の中寅彦と漱石は学問を「道楽科学者と捉えゐしか」と

夜々を真夜^{まよ}まで本読むくせとなり今夜も文明の「短歌入門」

ただ「短歌を作ってみよう」の授業とて何十年ぶりかの西浦小学校へ

迎へくれし小学五年生らのいきいきの空氣が忽ちわれを包みぬ

かつてありし昔のわれの授業のやう老いを忘れしこの一時間

短か夜の夜夜われにすぎにつつ今宵も冷めし白湯^{さゆ}のみて寝る

深きえにし

豊川 弓谷 久子

幼なき日の思い出のひとつ皇室に皇子誕生のあのお祝いの日よ

あの日より八十六年平成は今日より令和と移りてゆきぬ

戦争も焼土もバブルもひたすらに生活に追はれて生きて来りぬ

元氣かと声掛けくれる人のありレタスを摘みてくれる人あり

長生きもまんざらでも無し今日も又我のミシンは快調にして

片袖にて手提げ袋をひとつ縫う着る事無かりし紬の着物

また夢に姉が出て来ぬ親よりも深きえにしの姉なりき

住む人の無ければさぞや荒れをらむ姉の一生の終の住家も

干上がりし宇連川ダムにと念じをり大雨警報のニュースを聞きつつ

真夜中の雨音陰し雨漏りの音は無きかと耳すまし聞く

終活と言ひつつ又も仕舞い置く事も無き服の幾枚

異常気象は今日も続きぬ北海道の三十九度に驚きてをり

扇風機の出番となりしこの夕べ電気毛布をようやくたたむ

さまざまの花の色楽しむ今年又我がささやかなあじさいロード

さし芽よりすべて育てしものばかり紫陽花咲き染む六月となる

日本の漢字

東京 今泉 由利

初夏の光かえしてキラキラ蓮の浮葉のおほき露玉

簡単に生えこしごとく高層のビル林立す懐かしきこと消ゆ

日本の国立博物館を覆ふ如外来ユリの木今花盛り

東寺なる五重の塔の水煙の葱坊主の影を諸手に

地球の空飛行時間の長かりき地球の上の出来事思ひつ

元は海地層に深く潜りゆくエスカレーター幾つ乗り継ぐ

高く建つビルいしずえ礎に見ついたり石の中に石と化したる巻貝いくつ

日本の漢字となりぬ空海筆「不空絹索神変真言経」

毘沙門様踏みつけいたる邪鬼たちと眼まなこが合いぬ眼まなこ忘れぬ

文章で表はすことの困難を東寺講堂立体曼荼羅

ポケットのスマートフォンに写しある帝釈天の騎象の像を

東寺なる立体曼荼羅にまぎれゐる遠き遠き過去と一体

信仰といふを上手に知らざれば芸術として神様仏様

天も地も薄紫に覆おおはれて父上母上棟の花が咲きました

常の日の予定を全部キャンセルす誰にも言はぬ時の過ぎゐる

葱坊主

豊川 安藤 和代

黒マルチひかれし土に茄子苗は堂々正列勢ひており

色淡く下向きて咲くかたくりに重ねて母を想う野の原

近づけば飛び立つつばめ長旅の疲れゆつくりゆるり休めよ

毎食後五錠の薬飲む吾を案じくれし友入院と言う

庭の花ほめ行く人に黙す人蝶二羽もつれて今日も暮れゆく

国中の人の思いもそれぞれに平成最後の降る雨の音

令和とふ時も知らずに夫逝きて青葉若葉の光りがまぶし

母の日に母亡き孫よ何思う会話選びてひと日を過ごす

父母はすでに居ませぬ故郷に今年も栗の花咲くと言う

「生きるんだー」捨てられし葱に葱坊主蜂の二ひきを遊ばせている

耕運機畑打つ前を又あとを名も知らぬ鳥せかせか動く

夏野菜次つぎ植うる畑隅に大根の花の淡きむらさき

シルバーカー

春日井 清澤 範子

前立腺癌ヘルニアと病持やまひつ夫は今日心不全の診察すぐ入院の手続き
診察室では娘も吾も落ちつきて夫の身のまわりのもの運び入れたり
十日間の入院にてエコーも良し家族三人の生活に戻る

歩行困難となるに娘はやさしくて吾にシルバーカー買ひてくるも
介護用品の店にてシルバーカーを選ぶなり吾の好みの紫色の

シルバーカー握れば足はのびのびと運びよろしき娘に感謝

買ひ来たるシルバーカーを押してみる吾の体にぴったり合ふも

折りたたみロックかければひと休み腰をおろして歌を書くなり

シルバーカー押して楽しく歩くなり道には黄色のマーガレットが

休耕し畑は一面雑草の花愛らしくも除草剤をまく

剪定せし椿の枝にも五月雨新芽をぬらし光るその先

椿の葉をピアノの鍵盤たたくよふ雨は降ります台風風の風

虚しさ

大阪 伊藤 忠 男

また一人友失うや喜寿の年寂しさ募る我がクラス会
嘆くまい命尽きるも我が友の遺せし跡は我が誇りなり

日が薄れ別れの時か鐘の音に気を取り直し心沈める

コンクリの護岸工事も何のそのいつもの蛍いつもの光り

足腰の痛み気になる寝起きばな今日は雨傘欠かせぬ日なり

反応の鈍さ気づかぬ歳なのか免許返納勇氣いること

花見ての思いは我のその折の心写すかいつも異なる

椎ノ木の屋敷の跡にたたずむも今は藪蚊の棲むところなり

ここに門ここは土堀かあそこ納屋ありし昔にわが身おくなり

竿竹を振り上げ揺らす太き枝椎の実拾う我そこにあり

白く輝き

東京 矢崎直人

目に青葉父の運転秩父路を行く車内には感嘆尽きず

祝令和写真パネルの皇太子山を愛され大松閣に

父の背流してやらふ父に背流してもらふ初夏の温泉

谷間から望む秩父の山並の日の照る姿は白く輝き

この谷の奥へ奥へとあくがるままにさすらふ若き牧水

夏うぐひす鳴く声のする窓の外母に言われて森に探す眼

最初見た安くて遠い駐車場船山観音峠を歩く

観音の足元躑躅満開の向こうの下火渡りを見る

さつきまで晴れてた空が突然に連休どこか雹に降られる

一家四人やっぱり家が落ち着くね渋滞画面見詰めて麦酒

ひわ色を

東京 森岡陽子

薫風におむすび持つて公園へ一人は恥づかし老犬抱き行く

見上ぐるや何時の間にやら青梅は一枝に並ぶすき間なく並ぶ

静寂に靴音ひびく松の間は天皇受け継ぐ三種の神器

ひわ色を御召しになられた皇后様優しきまなざし凜とした御姿

令和なる平成よりの元号は万葉集より高貴なひびき

静かなる杜の中から突然に鴉なく声令和と鳴くよな

赤い薔薇令和を迎へ咲きほこる大輪の花赤い薔薇

夏初め亡き師を偲ぶ七回忌師の散歩道吟行で歩く

老木の桜の枝に花二輪小さく小さく緑の中に

青芝に自転車倒す青年はごろり寝転ぶ文庫本開く

お食い初め

豊川 白井 信昭

御馬西磯夫記念館角まがる道近くして二差路のお堂

引馬野の古道の名残と偲びきて角のお堂に『左ごゆ右よしだ』

万葉の二見の道ここ分岐点とも相聞の歌卷三にあり

嵐吹く日の暮れぬれば術すべを無なみ千度嘆きて恋つつそゐる

うらかな春の一時ひとときをわが家にて初孫匠真のお食い初めする

家族五人御膳料理の順順に匠真の口に箸もて運ぶ

口元に食べるまねがと幾度も代わる代わる写真に撮りぬ

ベランダに鯉幟ひとつ飾る部屋弁当食みつつ五人の団だんらん樂

今日よりは令和のみ代に我続けむ丹野城山歌碑の見回り

音羽川御所橋近く一本の白く咲き盛る名も知らぬ木あり

寡黙なれども

蒲郡 杉浦恵美子

瀬戸内の景色愛でたることさへも瞬時に遠のく叔父の訃報に
我が旅は予定せしこと叔父の死は思ひもよらぬが定めなき世ぞ
顧みて叔父と最後に会ったのは何時なんだろう思い出せない
次々として呉れしこと思ひ出づ寡黙なれども気の付く叔父を
折り紙はきっちり角が尖つてた叔父の器用さ母に通ずる

叔父一家我が家によく来た西浦の魚新鮮母の手料理

従姉妹等は愛子伯母ちゃんと母を呼ぶ何年ぶりに聞きし呼び名か
従兄弟等も我等も親を失へど親を通じて遊びし幼時

何十年無音なれども従姉妹等は糸口見つけば話題限りなし

弟は母を見るごと我を見るたつたふたりの同胞なれば

弟の体調戻りて安堵する幾歳なれども姉の身なれば

平常に気持はなかなか戻らない叔父を想ひて我が身を憶ひて

いつもの暮らし

豊川 山口千恵子

ざくざくとカットされゆくわが髪はいつのころより黒髪にあらず
トラクターの田起しするわきの道土の匂ひのただよひてくる

キジ鳩は啄ばみ啄ばみ庭歩む何か啄ばむ物のあるらし

手入れもせず庭隅におきしギンギアナム鉢よりあふれて花咲かせをり

窓の辺の楓のみどり濃みどりに青き葉こんもり繁りを増せり

花の咲く菜花の一株残しおき種を採らむところみてをり

出そろひし麦は穂列をなしてをり穂先かすかに風にゆれゐる

ひつそりと二人静は花終へて白き花穂はみどりになりぬ

電柱の天辺に止まり鳴く鴉遠くの声と鳴き交はしをり

連休といへども何も計画なし老いし二人のいつもの暮らし

風もなく暖かき日なり野の道にひばりの囀り姿は見えず

炊飯器に氷数片入れて飯をたくふつくらおいしくたけると聞きし

語源

横浜 阿部 淑子

異常なる真夏日猛暑の北海道偏西風の蛇行がもたらす

梅雨を前に厳しい暑さ熱中症来る夏怖いと会話聞こえる

長き年安易に使い越し熟語をば語源は何かと辞書引く楽しみ

撫なぜること摩さする擦こするはそれぞれに皮膚との関わり漢字で納得

世界初遺伝子情報解析で縄文人の体質を知る

百寿まで十一年の誕生日お人との喜びつなぎ生きたし

ねむり

豊川 夏目勝弘

生命ある生き物なべてに相等しく眠りといふを与へられをり

昼日中を眠る雑ありやなしや他愛なきこと一瞬うかぶ

夏の日の陰り始めし所よりユウゲシヨウの花は眠り始める

ゴミ袋を提げ行く片辺のユウゲシヨウ未だ花卉を閉じてゐにけり

暗くなれば眠ることの常となり縄文人の生活となる

一日の庭の仕事に疲れはて夢みることなく眠りつづけり

漸くにネムの若葉の調へりなれどいまは眠ることなし

次ぎ次ぎと他愛なき夢みる多し本を読むしかなき日の夜は

夢に覚めトイレに立ちゆくこと多しそんな日日の続くこのごろ

寝すごしたと起き上がれば闇のなか朝日の差し込む夢にてありぬ

眠ること食べることは生きることこの単純を思ふは少なし

心臓もいつかは眠るこの朝は百二十五と七十七なり

『いっしょに』

西浦公民館 いーはとぶ

穏やか今日の一日の暮れゆきて町の時報は五時を告げつつ
見らと来し春日^{かすが}の浜辺に戯ればわがショートの髪に初夏の風

稲吉友江

先生の影ホソバの間に見え隠れ振り返りつつ夕べのこの道
初めての役員会の終はりたり少し浜風に吹かれつつ帰らな

鈴木美耶子

東風^{こち}吹きて庭の馬酔木のゆらゆらとかの時の幼の簪に似て
漸くにかつて憧れし古典立花木蓮を主役に我は生けたり

吉見幸子

法要の寺院にて案内来る妹の家素通りして寺へ

半島の低き山には水はあり流れゆくのは放置田のひくみへ

牧原正枝

新しき年号「令和」をことばぎて号外取り合ふ映像に見ゆ
犬小屋に一片ふたひら花びらの風に吹かれて夕暮れの中

石田文子

満開のエニシダの花黄の花花びらこぼれつつただながめつつ
平成の退位のおことは慎ましく吾らも自づとつつましくきく

森 厚子

我を呼ぶ声は聞こえど今日ひとただ本を読みたき四月一日は
矢車の音青き空にカラカラと本読む我の耳にも聞こえつつ

山 崎 俊子

吾が庭の古木の藤のゆれてゐるその藤波のむらさきの色
ポンポン舟の船出は早し夢うつつに聞にしその音今は遙けし

三 田 美奈子

ファイヤーステック使ひ熟^{こな}せず娘に聞かば慣れて使へとけんもほろろ
主の無き庭の木蓮雨の中咲き誇りつつ人を待つごと

水 野 絹子

知人よりあさを貰ひて酒蒸しすその白き汁ことさら旨し
ゆつくりの暮らしを望みしわれなれど未だせはしきこの日々にして

牧 原 規 惠

現代学生百人一首

東洋大学

漫画読みピンチのあなたを救ってるヒーローになる夢を見ていた

徳島県立脇町高等学校二年 三木秀真しゅうま

ザーザーと気づいてやれない友からの「助けてほしい」の大雨警報

香川県立三本松高等学校二年 三好玄人げんと

矢をつがえ聞こえる音は何もしない空気を変える矢が当たる音

福岡県立稲築志耕館高等学校二年 大田心こころ

実習で沢山作るイチゴジャム匂い天国作業は地獄

福岡県立福岡農業高等学校二年 高田華山かざん

実習着物干し竿で迷ってる就職進学私の未来

福岡県立福岡農業高等学校二年 松岡 美里^{さと}

初夏に泳ぎたりないこいのぼりそして優雅に天を仰いだ

佐世保市立清水中学校二年 浦^{うら} 祐誠^{ゆうせい}

先輩と呼ばれて走る緊張感春光そそぐ体育館

佐世保市立清水中学校二年 田川 千晴^{ちる}

現実味おびてしまった原爆を今年の夏は考えていた

佐世保市立清水中学校二年 安井 七^{なな}星^せ

贈呈誌

森岡陽子

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○獅子舞の鯨あざなする子の髪飾り豊作願う稲穂がゆれる

永光徳子

○くるくると走る桜の花びらが風止みパタリと路上に貼り付く

林美智子

○身延線のダイヤを拾ふ旅にして帰路の「あずさ」に野の香りせり

松本英夫

冬雷 5月号

○金柑の実を食いおるは誰ならむ葉叢の中にその身隠して

江波戸愛子

○新しき防波堤に近きところ店舗と公園街路樹徐徐に

及川智香子

○雪解けの畑を歩けば柔らかき土に沈みて軌跡つづく

金野孝子

冬雷 6月号

○歩くたびガラスに写る吾が背は丸くなり进行直ぐ背伸ばす

池 亀 節 子

○霧けむる墨絵思はす竹林にさわり芽ぶく竹の子いくつ

増 澤 幸 子

○ひと日にて水満々の田に変わり聲するばかり蛙なくなり

飯 嶋 久 子

鹿兒島アララギ 5月号

○向かふ山の木々の新芽は輝きて仰ぐ空にはひるの半月

森 枝 む つ 美

○夕暮れて八分咲きなる甲突川の桜の宴に小原節踊る人ら

中 尾 千 賀

○この冬は雪を見るなく過ごしたり万両の実紅強し

郡 山 繁 幸

秋 楡 第一〇三号

○クイーンも曲も知らずに映画観て再度行きたい「ボヘミアンラプソディ」

中 島 宣 子

○目の前を過るそらごと遠き日のままに大楠二本登ゆ

木 村 郁 子

○雪吊りを外されし松のびのびと春の息吹に身を委ねゆく

杉 谷 良 子

風のひろば

高橋 育郎 作詞

風のひろばは こどものひろば
ほっぺのふくらむ かわいいこ
鬼ごっこするもの このゆびとまれ
ジャンケンポンよ あいこでしょ
まけたらおによ おいかける
風もいっしょに ワーイにげろ
風のひろばは げんきなひろば
かけあしするこ とんできた
このゆびとまれ なにして遊ぼう
おしくらまんじゅう おにごっこ
おにさんこちら 手のなるほうへ
風もいっしょに とびまわる

風のひろばは たこあげひろば
絵だこに字だこ やっこだこ
高くあがった うなりだこ
なわとびしましょう つなひきしょう
あっちもこっちも げんきなこ
風もいっしょに 遊んでる

風のひろばは 夕やけ小やけ
おててつないで かえりましょう
いちばんぼーし みーつけた
あしたてんきに しておくれ
歌をうたって おててをふって
さよならさよなら またあした

『俳句』

菜の花やバスの遅れも気にならず

浜田紀政

藤棚をゴールに決めてウォーキング

蜘蛛の糸雨滴を使ひ首飾り

古き日にもらひし紫蘭咲き満ちる

柳田皓一

草の間蜘蛛球のごと飛び跳ねる

炎昼の狛犬の影真つ黒し

暮の春浴衣を着たき日もありて

重野善恵

留守宅の庭にドクダミ咲き誇る

来客に新茶淹るる手母に似る

改元の令和の空に鯉のぼり

山迫京子

海神を祀る社や木下闇

蜘蛛の囿の昨夜の雨粒光りけり

存分に漁りて弛む蜘蛛の糸

山元正規

蜘蛛の囿に残る瑠璃色蝶の翅

蜘蛛の子の掃るるごとく散りにけり

ビルを背に掛け声響く三社祭

森岡陽子

蜘蛛の巣のこはすに惜しき編目かな

十葉は主なき庭の隅に群る

あぢさゐの濡れて明るき女坂

松本周二

はんざきの棲まふか清き淵の閣
街の灯や小さき田にも水を張る

蜘蛛の罫に一番星の懸かりけり

田中清秀

雨粒を貴石となせし蜘蛛の糸

満開のつつじに集ふ山男

ゆらゆらり虞美人草の芥子坊主

今泉由利

走り茶や膝を揃へていただきぬ

蓮浮葉輝やく露を宿しをり

雑踏の遠き会釈や昭和の日

植村公女

若葉風異国の言葉流れて来

楠若葉老女三人姫路城

渦を巻く米代川や山覚める

今泉如雲

ひしやげたるガードレールや八重桜

初花や弘前工業高生徒

楓咲く弘前こぎん研究所

お岩^{いわき}木山の裾緑さす雨上が

津軽野の夜明けや雉子ひと鳴きし

かさね吟行会

「東工大界限」 五月

田中清秀

東工大の大岡山キャンパスは、平成二十八年四月八日の吟行会でも訪れている。前回は亡き佐藤喜仙主宰の三回忌の吟行だった、その吟行文に「桜は満開を過ぎ散り始めていたが絶好の行楽日和で近在の家族連れがお弁当持参で集まり賑わっていた」とある。今回も天候に恵まれ大学校内の並木道や広場は若葉が鮮やかで爽やかな風がそよいでいた。喜仙さん（親しみを込め「さん」と呼ばして頂く）の命日は五月十八日、今回は七回忌の吟行会として行った。

師の思ひ出拾ふキャンパス花は葉に

素山

学生のなごむ木陰や聖五月

周二

実桜の転がる先の靴の跡

陽子

薫風の中を突つ切る大井線

しのぶ

令和元年五月十日、緑が丘駅に集合して徒歩で大学の北門へと向かう。校内の桜や銀杏の並木道には皐月の風が通り抜け、強い日差しを避け校舎を縫つての散策は

清々しく心地良い。しばらく行くと木立の中に静かに隠れるような池があり、近くのテニスコートからボールが飛んできたのか幾つか浮かんでいる。また、隣接の弓道場では数人の学生が弦を引き絞り練習に励んでいた。大学のキャンパスらしい若々しく規律有る雰囲気伝わってくる。

引き放つ弦の音残る若葉風

清秀

空の青学府のビルに緑さす

京子

構内に蜻蛉生まるる濁り池

さち子

若葉風手櫛で髪を整へり

れい子

東工大は正式には東京工業大学、創立から百三十年を越える国立大学でご存じのように日本最高の理工系総合大学である。二千年にノーベル化学賞を受賞した白川秀樹氏はこの大学の卒業生であり、二十十六年に同じくノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典氏は特任・荣誉教授として籍を置き、細胞のオートファジーの仕組みの解明は世界に広く知られている。大岡山キャンパスの中心である本館は一千九百三十四年に竣工し威風堂々たる風格があり、学生は入学後一年間をここで学ぶ。正門近くに有る先鋭的な建築フォルムの図書館は工業系大学のトップクラスの蔵書を誇る正に東工大の顔、並ぶ東

工大博物館は複雑な立体形状が組み合わされた印象的な建物である。また、本館前の桜並木にはウッドデッキが設置され銀杏の古木が風格を沿えている。大学設立に尽力した手島精一像が木陰から椅子に腰掛けた姿で静かに見守っている。近所の親子ずれが自由に校内を散策できる開放的な雰囲気は、善良公正で世界に通用する人材を育成して科学と技術の水準を高め文化の伸展と世界の平和に貢献する、という本学の使命の現れではないだろうか。

退官の記念の大樹緑さす

初夏のソーラーパネル大稼働

隠れ蓑ぐうちよきばあの若葉風

紀政

由利

正規

ゆつくりと校内を散策した後は大岡山駅方面に向かう、大井町線の跨線橋を渡ると駅前に出る。大岡山駅はメトロ南北線と都営三田線直通の目黒線、大井町線が乗り入れている交通の便が極めて良く駅前の商店街は常に入通りが絶えない。また、国内初の駅上病院の東急病院があり通院に便利と言われている。そして駅前を一步離れると静かな住宅地が広がり洗足池もこの近くで、喜仙さんのご自宅もここに有る。

句会場の大岡山精養軒は東工大蔵前会館の二階にあり

全面ガラス張りで広々としており、白を基調としたシックなレストランである。座席からは大岡山の街を見ながらゆつくりと食事を楽しむことができる。ランチコースを予約してあったので献杯のあと美味しい食事となる。句会と同じ席をそのまま使わせてもらい、いつものとおり三句出し四句選で行われた。厳しい論評もあるが和気藹々とした中で無事お開きとなった。

月日の経つのは早いもので喜仙さんが亡くなって既に六年の歳月が過ぎた。ありし日を偲び先月の兼題であった「囀」を詠んだ句をかさね会報よりここにより転載させて頂く。

咲き満ちて囀放ちゐたりけり

囀の一途の声のかさなれる

喜仙

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年七月十二日（金）

場所 有栖川宮記念公園

集合 有栖川公園入り口十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（八七）

丸山 酔宵子

『平成最後の高山祭』

雪溪が残る檜ヶ岳、穂高、乗鞍の山々に囲まれた飛騨の小京都高山は、平成最後の高山祭で、ここは日本かと思われるほどの外国人でごった返している。

高山祭は春の「山王祭」と秋の「八幡祭」の二つの祭をさす総称。毎年4月14日15日は高山に春の訪れを告げる日枝神社（山王様）の例祭で、京都祇園祭、秩父夜祭とともに日本三大曳山祭の一つである。

祭の幕開けは、日枝神社からの御巡幸。「大榎」を先頭に、社名旗・台名旗（屋台の代わりの旗を立てた台車）、獅子舞、鬨鶏楽（とうけいらく）と続き、袴姿（かみしもすがた）の警固武士達が神輿（みこし）を守り総勢三百名の大行列で、安川通りの南側・上町をゆつくりと進んでいく。その後、精巧な彫刻や織物、漆工などが施された高さ約7メートルの絢爛豪華な祭屋台11台がそ

ろりそろりと街中を練り曳き歩くのである。

「からくり人形」が具えられている3台の屋台が、高山陣屋（代官所）前に設けられた御旅所前で、三番曳・龍神台・石橋台の「からくり奉納」が行われる。熟練の綱方が幾本もの綱を操って人形を操作する大変高度な技術で、飛んだり回転したり着替えたり、生きているかのような人形の、繊細かつ大胆な演技に、「ウォー、ブラボー、スゲエ」と大感嘆しきり。

高山は高山城の城下町、商人町として発展し、出格子が連なる古い街並は、『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で最高ランクの3つ星に選ばれた。更に高山祭がユネスコ無形文化財遺産に指定され、外国人特に、ヨーロッパ系の家族連れの観光客が多いようで、その数は90,000人とも言われていて、日本人観光客より多く感じられる。

タイムスリップしたような街並には、お煎餅屋、みたらし団子、飛騨牛コロッケなどのお店が並んでいる。さて、長蛇の列の先は、極め付き、軽くあぶった柔らかな「飛騨牛握り寿司」。彼方此方（あちこち）から「セボン、レッ

カー、デリシヤス、ブオノ、ハオチー、美味しい！…」
平成も終わり、新元号「令和」を記念し、5月1日には春と秋の祭屋台合計21台が市内に勢ぞろいする「高山祭特別曳き揃え」が行われる。

(*) 本稿を執筆したのが平成4月末で、5月1日には新年号「令和」記念「高山祭特別曳き揃え」は晴天に恵まれ無事成功裏に奉納されたということです。

高山のからくり踊る春祭り

酔宵子

楽しい時間 80

山本紀久雄

2019年5月31日

神にならなかった鉄舟・・・その十

明治神宮外苑に建つ聖徳記念絵画館は、平成23年（2011）に重要文化財に指定され、この絵画館の中に80点の壁画（縦3メートル・横2.7メートル）が整然と並んでいる。

そのひとつが、山岡鉄舟が重要な役割を担った江戸無血開城をテーマに画家・結城素明が描いた『江戸開城談判』である。

絵画館の内部空間は、中央の大広間から左右両翼に回廊がのび、正面向って右翼側（東側）の第二画室と第二画室に日本画40点、左翼側（西側）の第三画室と第四画室に洋画40点が並んで展示されているのであるから、「美術館」と称されてもよいと思

われる。しかし、ここはあくまでも絵画館なのである。それは成り立ちの特異性にある。通常、美術館や博物館はコレクション



が存在しており、その収蔵ほかを担う建物として社会的に要求されたという性格が存在する。

だが、聖徳記念絵画館は施設を建設しようと決定した時、まだ展示する絵画を持たず、これから制作しようという手順で進められたものであるから、美術館や博物館とは、その成り立ちの性格が異なり絵画館に位置付けられる。

さて、聖徳記念絵画館に掲示されている『壁画』は、全て二世五姓田芳柳が画題に応じた『下絵』と『画題考証図』を描き、それに基づいて選定された画家が描くという手順で行われた。『江戸開城談判』の『下絵』（上）と『画題考証図』（下）は以下である。



『下絵』と『壁画』とでは異なる部分がある。その部分を拡大して比較してみる。

左が二世五姓田芳柳の『下絵』、右が結城素明の『壁画』である。どこが違っているのか。それは海舟の刀に位置である。西郷は無腰で刀は所持していないが、海舟は刀を左脇に持ち会談に臨んでいる。刀を右脇に置くのと、左脇にするのでは、全く意味が異なる。左脇に置く場合は「直ぐに抜ける」体制で「戦う意思がある」と思われても仕方ない。右脇は平和的な会談を示すだろう。どうしてこのような反対の刀の置き方になったのであらうか。

慶応4年（1868）3月14日、確かに三田の薩摩屋敷で二人は会談している。鉄舟も同席しており、西郷の背後には桐野など武士もいたわけで、会談したのは事実であるから、この『壁画』は史実を物語っている。



しかし、刀の位置の違いは、会談の本質的意味を異ならしている。右に刀を置いた芳柳の『下絵』は、既に江戸無血開城は鉄舟と西郷による駿府談判で決まっていたのであるから、平和的に江戸城の明け渡しの手続きを会談していると想定できる。

だが、刀を左に置くという素明の『壁画』描き方は、まだ無血開城が決まっていないので、海舟が決死の覚悟で会談に臨んだことを表現しようとしたのだと見ることもできる。

これを証明するテレビ番組が、NHKBSの2019年3月3日『壮麗な美術館で日本の歴史を辿る「聖徳記念絵画館」(東京・明治神宮外苑)』というテーマで放映された。フランス人の美術史家ソフィー・リチャード氏の『フランス人がときめいた日本の美術館』をヒントに、女優・野村麻純さんが訪れる番組で、解説に登場した同館副館長が『江戸開城談判』壁画の前で次のように力説された。「この壁画は緊迫した場面を表現しています。それは刀の置き方でわかります。通常は右側ですが、これは左です。この会談が決裂したらどうなるのか。その時は……という海舟の決意を伝えているものです」と語った。

つまり、江戸無血開城は慶応4年3月14日の会談で決まったという見解を述べたのである。この副館長の見かたを逆説的に理解すれば、茨城県近代美術館が所蔵する③の題「無記名」の『下絵』は、右側に刀を置いているわけであるから、この会談以前、つまり、鉄舟と西郷との駿府談判で無血開城は決まったという理解に結びつくのではないだろうか。

絹の話 (104)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹の来た道 これからの道 (その4)

日本の繭生産、養蚕技術世界一

日本は繭生産世界一と信じておられる人が大勢いますが、今から80年くらい前の事で、絹五千年の歴史の中でほんの80年間くらいのものです。それは明治初期から昭和の日中戦争が始る以前（繭生産高約40万t、昭和13年の輸出総額の約45%）迄で、他の期間は中国が世界一です。太平洋戦争後やや復活しますが、化学繊維の出現と労働集約的な養蚕事業が敬遠され、繭価格も他産業就労に比べて低廉で、治水事業が整備され、転換作物等の奨励もあり、現在はほんの少量（約200t）です。

しかし明治初期、昭和60年代にかけて研究された日本の養蚕技術は現在も世界一です。

その技術はタイ、インドなど東南アジア諸国に、最近ではアフリカ諸国（エチオピア、ケニア等）にODA等を通して移転されています。しかし完全家畜化された家蚕といえども、養蚕は簡単なようではなかなか難しく、何処

の国でも成功するとは限りません。

養蚕世界一への道程

日本の養蚕は米の伝来と同じ頃中国から伝えられたといはれ、古墳時代から奈良、平安時代に至る迄中国や朝鮮半島から大勢の養蚕、機織、染色移民を招聘して絹産業の振興に努めて来ました。7世紀になると国内生産が一段落して、大化の改新において朝服の絹の着用と官位による色を決めました。しかし十二単に見られるように上着は唐からの舶来物を着るのが一般的だった様で、高級品は渡り物の時代が江戸時代後期まで続きます。貨幣経済が発達して来た江戸時代には絹の需要は増すばかりで、その需要に応えたのがオランダ船で清（中国）の廈門から長崎にもたらされる絹（織物、糸）でした。

オランダ商人はその対価を純度の高い慶長小判等を求め、流通小判の不足が生じる一因にもなり、江戸幕府は純度の低い貨幣改鑄を繰り返すので、オランダ商人はたまりかねて一朱銀を求めるようになって行きました。

一方幕府は奢侈禁止令を出し、庶民に絹（生糸の織物）や華美な色彩の物を着る事を禁じてきました。

江戸時代後期になって遂に幕府は中国からの生糸の輸入を禁じたのです。そこで困ったのが中国の上質な生糸を使って高級品を織っていた西陣はじめ諸国の高級機屋

でした。彼らは中国に劣らない糸を国内で作る事に東奔西走して中国に勝るとも劣らない糸を作る事に成功して行くのです。これが絹生産世界一になる第一歩でした。

アヘン戦争と明治維新

江戸時代末期（1840年以降）ヨーロッパでは欧州全域に猛威を揮っていた微粒子病（蚕の病氣）でヨーロッパの養蚕業が壊滅状態になり絹生産が止まり、需要に応じられなくなっていました。インドを植民地にし、綿花やスパイスを手に入れたイギリスは更に東進をすすめ、東インド会社をして中国の絹を手に入れようとアヘン戦争を起こしたのですが、清朝が弱体化して絹を思うように輸入できなくなっていました。

その様子は琉球を通してつぶさに見ていた薩摩藩が明治政府の主導権握ると殖産興業の柱を「絹」に据えたのです。この事が絹生産世界一になる第二の大きな要因です。

渋沢栄一と富岡製糸場

江戸末期はより良い糸を作るため各藩、特に水利が悪く稲作が不向きな地域では蚕種、養蚕技術の改良に熾烈な競争をしていました。それを指導したのが豪農の蚕種業（養蚕農家に蚕の卵を売る）の人々でした。

渋沢栄一は現在の埼玉県深谷市の蚕種農家で蚕種、養蚕技術の改良に心血を注ぎ、山形地方など対抗する何処よりも優れた蚕種と養蚕技術を確立して行きました。

それから京に出て維新の混乱の中を生き抜いて士分になり、明治政府の民部省（現経産省）に入り、西欧視察の経験と人脈を生かして、フランスの最新式動力製糸機と技術者を群馬県富岡に誘致招聘し「富岡製糸場」を明治5年に創業させると云う大仕事を成し遂げるのです。

一方、東京青山に養蚕所を開き皇后陛下にも養蚕をして頂き、現在も続いています。

富岡製糸場が果たした役割は実に大きなものがありました。それ迄の日本の絹は各藩の規格で、品質のバラツキが多く、幕府は検査を通ったものに印紙を貼らせたり改革に努力をしていましたが、輸入業者を困らせていました。富岡製糸場は各藩の藩士の子女を中心に募集し、技術の伝習を終えた者を郷里に帰し、各地の製糸技術と糸の品種の向上を計りました。

また、政府は蚕糸業法を制定し、蚕種の管理を徹底し、各県に蚕糸試験場を設置して蚕の生理、病理、飼料、機具などの研究と養蚕農家の指導に当たらせ、収量増大につなげてきました。短期間で繭の世界一生産国になれたのは明治と云う時代のうねりはあったものの勤勉な国民性が大きな要因ではなかったでしょうか。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年5月27日

汗腺を

暑いですね

ただこの時期

まだ身体が暑さに慣れていません
慣れていないとは？

汗腺がまだ寒気対応になっていて
開いておらず

暑くても汗がかけないんです

ということとは

体温が下げられず

熱が身体にこもってしまうんです

熱中症の汗がかけないバージョンです

むくみが酷くなったり

熱がこもり身体が怠く不調だったり

などなど

身体に負担が多々出ます

ですので

汗腺を開くために

湯船につかり汗をかく

適度な運動をする

などの

汗をかく様にしていきましょう

身体を冷やさない

温かいもの飲むなども効果的です

2019年6月3日

湿度と気圧

湿度が上がってきましたと

気温が高い時より

身体が重く怠くなります

そろそろ

梅雨の気配を感じます

昔は

梅雨の時期は肌寒かったのですが

最近では

蒸し暑くなっています

熱中症 要注意です

くわえて

気圧の変化がありますので

頭痛や肩こり

吐き気や身体のだるさ

なども併発しやすくなります

睡眠

水分補給

深呼吸

適度に身体を動かす

などをして

身体の流れを止めない様にしていきましょう

「江上浩二の独り言」 19

江 上 浩 二

45年前の万葉の旅と令和

令和元年5月の連休明けに始まった築30年の我が家のリフォーム工事の為に数か月前より、家の中の断捨離を子供達に急（せ）かされながらやった。ちょうど5月17日の朝、断捨離を済ませ生き残った古本が綺麗に並べられて、ベットの横の本棚の奥の右側に、万葉の旅（上、下、現代教養文庫・社会思想社・1972年）が見えた。そうだな、理系の学生の私だったが、学生時代、時間があるとその万葉の旅で詠われている万葉歌の故地を尋ねるの趣味としていた。学生時代の講義では故江藤淳先生のレポートで悲劇の大津皇子や二上山を題材にした時もこの万葉の旅にお世話になった。

前置きよりも、私はとっさに、下巻を掴み見出しをパラパラと送り、キーワード…大宰府を探してしまった。大宰府には（一）（二）があつて、見出しの（二）の前

のP126に「梅花の宴」が纏められており、約45年前に手にした本には、こう書かれていた。

梅花の歌三二首と中国詩文を模倣駆使した美文の序とが巻五に所収されている。

序の一節に「時に初春の令月、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き・・・」

この一節が新年号・令和の由縁とされたもので、世間で騒がれている大先生以上の著者の犬養孝氏は既に昭和39年9月にあとがきを記している。

残念だが、当時九州旅行では他の万葉歌が歌われている地区を旅してしまった。大宰府は超有名どころで、当時は徒歩でしか行けないような鄙びた別な所を探し回った。本の見出しに鉛筆でチェックした跡が残されている所を旅したのだなど記憶を戻した。学生時代という短い期間ではあったが、本で見たり、実際に訪れ、∞世紀ごろ以前の日本の国の広さ（文化、支配圏）が、万葉歌が

詠われている最北端地、最南端地で理解できるのではないかと思い、訪ねてみた。

最北は東北線の小牛田近くの黄金神社（当時金が採れたという）で、せいぜい宮城県多賀城遺跡の少し北であり、最南は鹿児島県阿久根市の薩摩の追門（黒の瀬戸、鳴門の渦潮みたいな流）である。黄金神社は雪降る大学3年生の2月ごろ訪れ、当時は本当に普通の神社で私の他に誰も訪れている人はなかった。薩摩の追門は少し暖かい時期に尋ね、確か国鉄の阿久根の次の折口駅から徒歩で往復した。いわゆる天草の入り組んだ瀬の一つで、古代当時は隼人が中心だった地域である。歩いて腹が減ったので確か駅前の小さなラーメン屋で麺を注文したら、ちゃんぽん麺みたいな汁と麺が出され、おばさん一人でやっている店で味わった。阿久根へは薩摩半島の長崎鼻を訪れ、西鹿児島経由で来た。当時の国鉄の列車に乗っていて非常に脳裏に焼きついている事は、北九州辺りの方言は分かるのだが、熊本を過ぎもつと南の地域では乗り込んできた老婆の九州弁は若い学生にとってイントネーションがベトナムかアジア南部の方が話している

様だった。

この万葉の旅は上、中、下の3冊あるのだが、今は（中）が迷子で見当たらない。（上）にはメツカの大和地域で詠われた万葉歌が多く紹介され、詳細に分類されている。付け足したがこの（上）を参考にして、学生当時（1976年頃）、友人の父親が単身赴任で住んでおられた奈良西大寺近くの官舎を根城にさせて頂き、大和三山、山の辺の道などを、友人と供に歩いて味わった。色彩豊かな壁画が描かれた高松塚古墳が1972年に発見された4年後であるが、当時は見学者を受け入れる状況にはなっていなかったと思う。

九州の旅は鹿児島大であった学会の後の一人旅だったが、今振り返ると昭和の帝が、約13年後に身罷われ、更に30年後に現上皇が自ら退位の意を表され、普通は深い悲しみの中で新年号を受け入れるのであるが、この令和の新年号はどちらかというと慶事の雰囲気漂う中で待ち望んだ。予期もせず、こういう初めての、心の持ちように万葉歌がしてくれたと想いたい。

漢詩研修 (三十三)

千代田岳精会 平井茂行

壇^{だん}の浦^{うら}夜^や泊^{はく}

木^き下^{した}犀^{さい}潭^{たん}

逢^{ほう}窓^{そう}月^{つき}落^おちて眠^{ねむり}も成^なさず

壇^{だん}の浦^{うら}の春^{しゅん}風^{ふう}五^ご夜^やの船^{ふね}

漁^{ぎよ}笛^{てさい}一^{いつ}声^{せい}恨^{うらみ}も吹^ふいて去^さる

養^{よう}和^わ陵^{りょう}下^か水^{みづ}煙^{けむり}の如^{ごと}し

逢窓月落不成眠

壇浦春風五夜船

漁笛一聲吹恨去

養和陵下水如煙

【作者】

木下犀潭（一八〇五～一八六七）江戸末期の儒者。肥後菊池郡の農家に生まれ、長じて肥後熊本藩に仕えた。名は業広なりひろ。字は子勤しきん。通称宇太郎のち真太郎と改める。犀潭さいたんは号（他に澹翁たんおう、韓村いそんとも）である。幼時より聡明の誉れ高く、十歳で桑満負郭について学び、のち時習館助教大城壺梁おおきこりょうに従学、学問素行が秀でていたため名字帯刀を許され、二十二歳の折りに木下姓を名乗った。

【解説】

壇の浦は、下関市の東端に位置し、平家滅亡の地として名高い古戦場である。寿永四年（一一八五）三月二十四日、僅か八歳の幼帝安德天皇が入水して戦いは終結した。安德帝は、阿弥陀寺の養和陵（山口県下関市阿弥陀寺町）に葬られている。詩は、旅の途次、船をとどめて昔日を想っているのである。

【語釈】

※夜泊……夜、船中に泊まること。 ※蓬窓……船の窓のこと。 ※五夜……五更と同義。一夜を五分して、

甲夜、乙夜、丙夜。丁夜、戊夜とする。戊夜はいまでいう午前四時頃。※魚笛……漁師の吹く笛の事。※恨……安德帝、および平家一門の恨み。※養和陵……安德天皇の墓。

【通釈】

先刻まで、船の窓に見えていた月も沈んでしまったのに、なかなか眠れない。今宵は、壇の浦で船泊りをすれば、暖かい春風が吹きわたって、もう五更（午前四時）もとうに過ぎている、すでに漁を始めた漁師の笛の音が、安德天皇はじめ平家一門の恨みを込めるかのように、一声響きわたる。見れば、安德天皇の墓、養和陵の下手あたりの海面は煙が立ち込めたようだ。

『奥の細道 奥州へ』

中屋保之

黒羽滞留（元禄二年四月四日～十五日）

黒羽の館代浄坊寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじのよろこひ、日夜語つ、けて、其弟桃など云か、朝夕勤とふらひ、自家にも伴ひて、親属の方にもまねかれ、日をふるまゝに、ひとひ郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣、与市崇高扇の的を射し時、「別しては我国、氏神正八まん」と、ちかひしも、此神社にて侍と聞ば、感応殊しきりに覚えらる。暮れば桃翠宅に帰る。修験光明寺と云有。そこにまねかれて、行者堂を拝す。

芭蕉一行は、本文では「浄坊寺何がし」とある、俳号秋鴉（又は桃雪）を持つ黒羽藩家老の浄法寺高勝を訪ね歓待を受けた。訪宅の際の挨拶吟に、

山も庭も動き入るや夏座敷

を残している。また、光明寺では役行者の足駄を拝み、行者の健脚にあやかろうとしたのか、

夏山に足駄をおかむ首途哉

と詠んだ。

当国雲岸寺のおくに、仏頂和尚山居跡あり。

豎横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせは

と、松の炭して岩に書付侍りと、いつそや聞へ給ふ。其跡みむと雲岸寺に杖を曳は、人々すゝむて共にいさなひ、若き人おほく道の程打さはきて、おほえす彼麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道はるかに、松杉くろく苔したゝりて、卯月の天今猶寒し。

十景尽る所、橋をわたつて山門に入。

さて、かの跡はいつくの程にやと、後の山にかけのほれば、石上の小庵岩窟にむすひかけたり。妙禅師の死関、法雲法師の石室を見るかとし。

木啄も庵はくらはす夏木立

と、とりあへぬ一句柱に残侍し。

ここ黒羽に長逗留をしている理由の一つは、かつて禅の教えを受けた仏頂禅師の足跡を辿るためであろうか。仏頂和尚は鹿島根本寺の住職で、江戸深川の臨川庵に寄宿していた折に、鹿島神宮相手の訴訟を起こし、勝訴するといった経歴の人物であった。芭蕉はその間深川で仏頂の知己を得、禅を学んだようである。

勝訴したあと、あつさり住職の地位を捨てた恩師の生きざまは、西行と並んで、芭蕉の理想とする世捨て人の姿で、その庵跡を訪ねる事が芭蕉を「雲巖寺」へと向かわせたのであろうか。

因みにこの句は、六世紀の後半、仏教伝来に反対し寺や仏像を焼き払った物部守屋を、崇仏派の曾我馬子が殺害したが、『物部守屋の霊は啄木鳥となり、寺でらをつつき破るようになった』との伝承に基づき、仏頂和尚の庵はその啄木鳥でさえその徳を敬しつつき破らない、との崇敬の念が感じ取れる。

（遊行柳 元禄二年四月二十日）

又、清水ながるゝの柳は、芦野の里にありて、田の畔に残る。此所の郡守故戸部何某の、「此柳みせはや」など、折をりにの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、けふ此柳のかけにこそ立寄侍つれ。

田一枚植て立去る柳かな

遊行柳には、室町時代、時宗十九代尊酷上人がこの地を訪れた際、柳の精の老翁を念仏で成仏させたという言い伝えがある。この柳を西行が「道の辺に清水ながるる柳影しばしとてこそ立ちどまりつれ」（『新古今集』）と詠んでいる。西行五百年忌に於てこの時にこの地を訪れる芭蕉の感慨が偲ばれる。

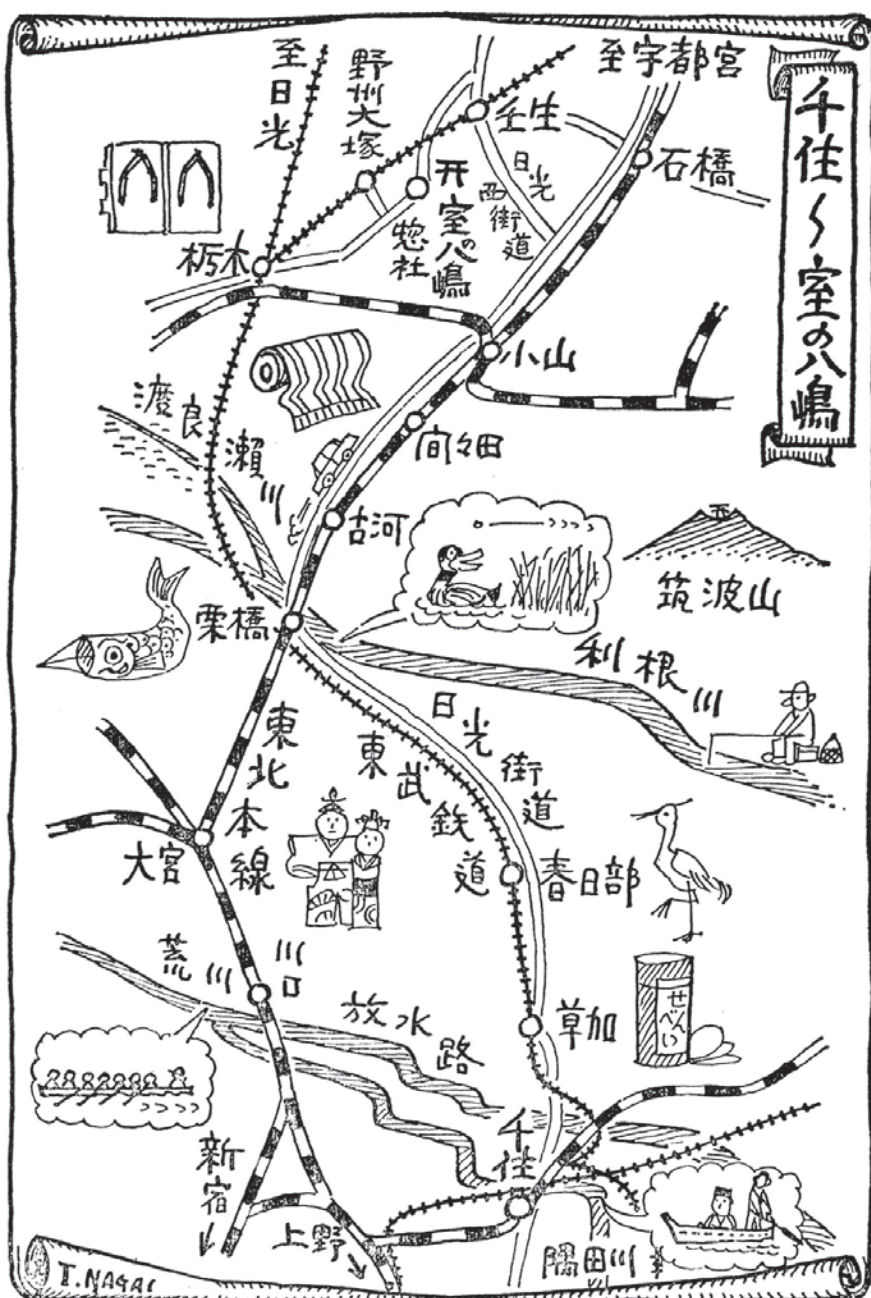
（白川の関 元禄二年四月二十一日）

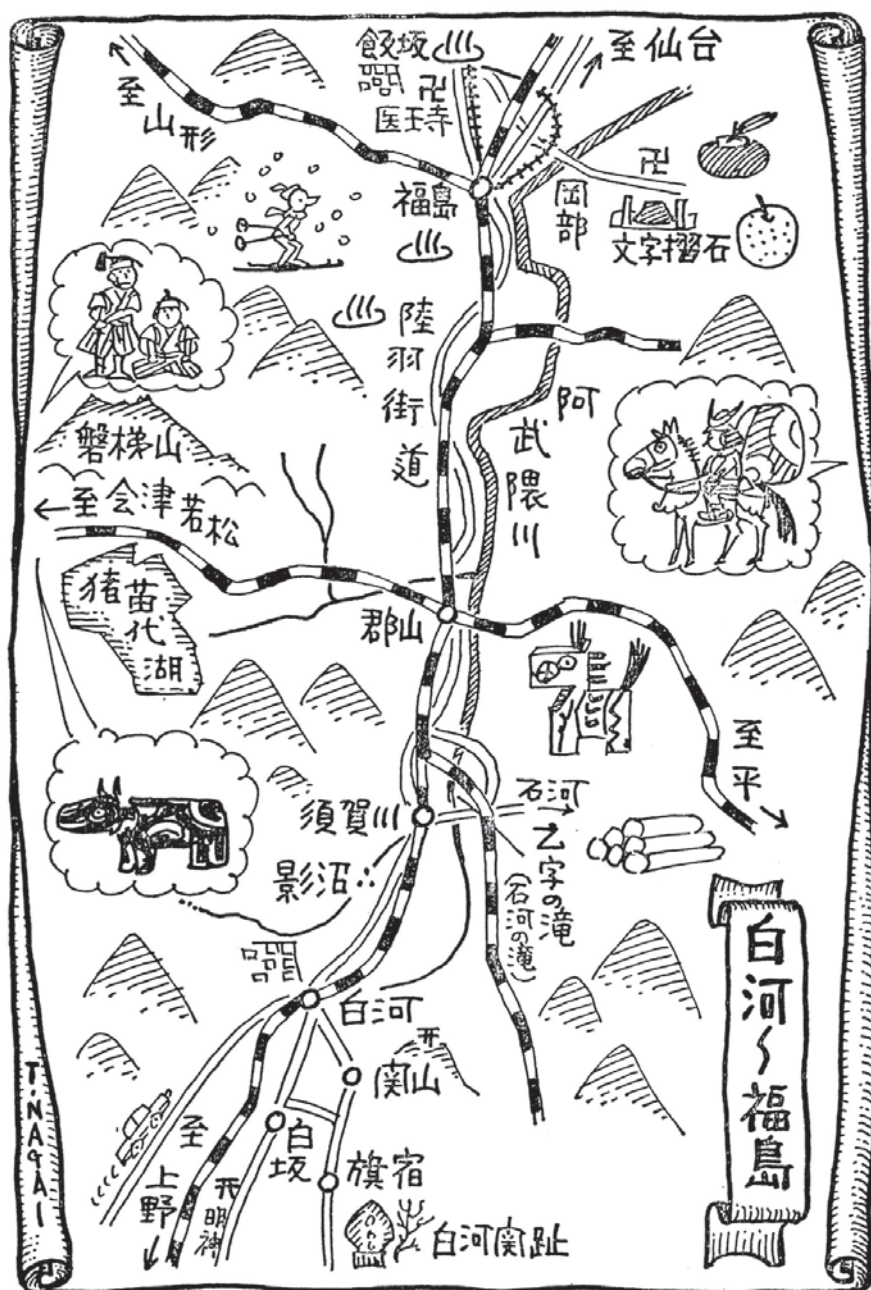
心もとなき日数重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。「いかて都へ」と便求しも断なり。中にも、此関は、三関の一にして、風騷の人、ここをとむ。秋風を耳に残し、もみちを俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆるこちそする。古人冠をたしし衣装を改し事など、清輔の筆にもとめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな

曾良

【註 風騷の人：文人墨客など風雅の人のこと。芭蕉は、「騷」の字を「操」の手偏を馬偏として表記している。変換不能のため代用】







夏きたるらし

夏 目 勝 弘

天皇（持統）の作られた歌
○春すぎて夏来たるらしるたへの衣干したり天の香具山
（一一一八）

万葉の人びとも、季節の変わり目には、敏感だった。

現代人も変りがない、昔も今も、これからも四季のある日本では、変ることはない。

冬から春にかけての雑草は、ホトケノザとヒメオドリコソウであり。

ホトケノザは在来種・ヒメオドリコソウは明治時代に、ヨーロッパから侵入してきた。

同じシソ科であり、群生する傾向があり、我が家の狭い庭の空地にて、ホトケノザとヒメオドリコソウが二分して攻めぎ合っている。

先にヒメオドリコソウが色褪せ、そしてホトケノザが枯れ始め、そのなかにタチイヌフグリの小さな水色の花が、目につくようになれば、春は終りに近づく。

春の雑草の枯れた跡には、次の雑草のユウゲンシヨウの花茎が、後は、お任せとばかりにツクツクと立ち始める。

まだ花の付かない雑草の緑のなかに、オツタチカタバミの黄色の小花が、アクセントとなってきた。そして一点二点とユウゲンシヨウのピンクの花が咲き始めると、もう初夏となる。

○このごろの恋のしげけく夏草の刈り払へども生ひしくがごと（十一一九八四）

今年の春は雨が少なかったためか、庭の冬草の伸びが遅く、油断をしていた。

暖かい日が続き、雨が降るようになると、庭の雑草どもが元気づき、急に伸び始めた。

作者名のない、巻十の一九八四の一首の（夏草の刈り払へども生ひしくごと）と歌っているような、雑草のなかに、白い小菊のような数十株の群生が、今年始めて生え出た。カミツレだと思ふ、カミツレの種子は、重力散布のため、風や小鳥らによるものではないことは確かである。コンビニに行く道沿いには、数株のカミツレが咲いていた。種子を靴に付けてきたとも思う。

カミツレは、薬用として江戸時代に、ヨーロッパから移入され、ハーブとして栽培された。ドイツ、ベルギー、ハンガリー、ソ連などに多い。日本では大阪府などで栽培。

ヨーロッパでは、古くから発汗、感冒、リウマチ、せん痛、下痢など駆風薬として、持ちいられていた。

雑草にも花は咲く、小さな花でも花は花であり、狭い庭のなかで今咲いている花は、ユウゲンシヨウ、オツタチカタバミ、タチイヌフグリ、ムラサキカタバミ、アメリカフウロソウ、などなどである。

十日もすれば咲くであろう、キキョウソウが待っている。二年前からキキョウソウが増えだし、他の雑と共に抜き取ることをせず、キキョウソウのみ其処ここに、二、三本づつを残し、庭のアクセントにしてみた。

今はまだ花はないが、もうすぐに紫色の小さな花が咲く。庭道の出入に歩むとき、なんとなく楽しくなるような気がする。

種も時かず、苗を買ってきて植えなくとも自然に育ち花を咲かせ防虫剤など散布しなくとも良い。

（参考文献・万葉集、土屋文明、河出書房新社、植調雑草大鑑、浅井元郎著、全国農村教育協会、原色日本薬用植物図鑑、木村孟淳・木村康一共著 保育社）

「氷魚」のことから (222) 岡本八千代

令和になってから、私、忙しくなってきた。私の母校、西浦小学校より短歌のことについて「来て下さらないか」とのこと。――

それは、小学五年生の生徒たちが「短歌を作ってみよう」という試みの授業のことであった。小学五年生といえどもまだ子供だ。島木赤彦は「歌の創作は、子供には無理だ」と言っていたことを思い出し、躊躇したけれど、時代が変ってきたからと思つてゆくことにした。

五月二十二日2時30分から授業であった。校長先生と五年生担任の女の先生が迎えて下さった。生徒たちは男女合わせて二十人ばかりであった。

いよいよ授業が始まつて、私の紹介があつて、生徒たちと目と顔が合った。私のすぐ隣の坊君もいたりして、いちどに楽しい明るい雰囲気になつてきた。みんなにこにこしている。私もにこにこになつてしまった。

授業は、いつのまにか、私に集中して、とにかく五七五七七にして、字足らず、字余りだけわかるようにして進んだ。

いつのまにか、出来た作品をみんな私に見せにきた。私は、忽ち全員の作品を見て、直す処はたゞ口に言つて直させてみた。――

小学五年生といえ、あんなにも生き生きとしているものなのか?と楽しい時間だった。

その時の印象が心に残つたまま私は、またドナルドキーン

著、新井潤美訳の本にたよつて、今回は、斎藤茂吉の歌集「赤光」の中にある恋愛の歌をとりあげてみたい。

○木のもとに梅はめば酔しをさな妻

ひとにさにづらふ時たちにけり 茂吉

さにづらふ＝(さ丹頬ふ)――枕詞《サは接頭語。赤いは

ほをしたの意》紅顔の意から君妹にかかる。

When, under the tree.

I bite into a plum, how sour!

The time has passed

When my childlike bride

Used to blush before people.

この歌は、母親の亡くなった年に茂吉は恋におちた時の作歌であった。連作もあつて、「はつはつ」とか「ほろほろ」、「ほのほの」「しんしん」などの重複によつて作られた語や、また万葉調の語尾などを使つてみごとな効果があげられていたと言われている。また意味はそうわからなくても、言葉の美しさだけで強い印象を与える歌もあると言われている。長塚節は「作者がこの一首を構成する時には、ただ何となくかう言いたくて堪らなかつたであらう。そこに一つの無関係のものをさつと結びつけて放さない力がある」と言っている。そもそも、茂吉は子規の歌集に強い感銘を受けて、伊藤左千夫に弟子入りして、島木赤彦の跡を継いでいった人である。処女歌集(大正十二年)「赤光」から、アララギ派の人たち、文壇にも大きな反響を呼んだ。――

編集室だより【二〇一九年五月】

今泉 由利

○三河アララギ七月号の表紙を「螢袋」に決める。キキョウ科、ホタルブクロ属、多年草。最近は、勇の良いホタルブクロが多くなったけれど、昔のままの、消え入りそうなこの絵は皇居東御苑で描かせていただいた。

○大井町線の「緑ヶ丘」に集合し、東工大の校庭の、すでに散ってしまった桜の古木の下で、「かさね句会の佐藤喜仙主宰」先輩をしのび、大岡山の精養軒にて七回忌の献盃。いまでも続けてご指導いただけたら、どんなにか良かったか、残念ばかりを思う。お世話になりました日々が、とりかえせないことを知る。

○仕事で日本に来ている玉由のOFFの一日を浅草探訪する。まず、合羽橋道具街。頂度この辺りが休日の日だったから、開いている辺りで、頂度良かった。新しい道具に新しい生活を思い描いたり、常ではない気持ちになるのがおもしろい。途中、私の人生で一番美味しい、と思った「うなぎ屋」にめぐりあえ、おおきな希望が出来た。

浅草寺を通り抜け、隅田川を渡り、いざいざ歩いて歩いて、スカイツリーにゆき着いた。すごい行列だったけれど、「外国に住んでいる人は、こちらへ」という指示があり、

すぐエレベーターでのぼる。いつも動き回っているあたりが一望出来た。後、水属館へ降り、くらげと遊ぶ、チンアナゴと遊ぶ、ペンギンはもう一日の仕事を終えて寝る態勢になっていた。このペンギン達のご郷、アルゼンチンの南極近い方に行った時のことをこのペンギン達に話してあげたりしたのでした。

○国立博物館、平成館へ。東寺「空海と仏像曼荼羅」に出掛ける。博物館の前庭の大きな「ユリの木」に若葉が繁り、葉の間に間に、黄色・緑・オレンジ色の花が咲いている。沢山沢山、満開というのだろうか。冬木の枝々ばかりのユリの木を描きに來たり、この木の四季に付き合っているから、この日の花に大感激。

常々おめにかかれない、仏様達が、東京までいらして下さったのだから、しっかりと、一緒にさせていたいただいた。古い時代から、今の私がつたないことをしていると同じ目的があることに感動する。今まで、気付かないで過してきたことを、身近に気付く感動、吃驚してしまったり。仏様、ありがとうございます。

○東京駅前のキッテ博物館にゆく。

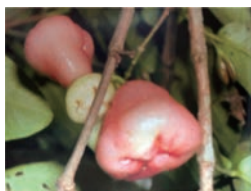
葉っぱ類、石類、動物達の様々…。子供時代から一緒にいたものが多くあり、そのうえ、日本では知り得なかった様々も、心ゆくまで一緒に居ることが出来る、ありがたいスペースです。

野菜・まんだら (17) レンブ・蓮霧 フトモモ科 フトモモ属



○原産地・マレーシア、シンガポール、台湾、インドネシア、フィリピン、亜熱帯から熱帯気候の国。

○常緑小高木。地域ごとに異なった形態をして種類が多い。



○桃色、淡いグリーン、白、濃赤色・・・果実の色や形が様々。ピカピカのワックスのようなつやがあり、ワックスフルーツともいう。

○片手にすっぽり治まるほどの大きさで、皮をむかずに噛りつく。



○梨とりんごを半々にしたような果肉は淡白。さわやかな歯ごたえ、さわやかに甘く、さわやかに酸味があり、あまりにも自分好みで忘れられない果実となる。



○台湾のレストランで、丸ごとの果実がデザートと出された。「これは何?」と質すと、店主が紙をもってきて「蓮霧」と漢字を書き、「レンブ」と教えて下さった。その当時、日本では見かけることが無かったから「日本へ輸出して下さい」とお願いすると「デリケートで日もちしないから無理です」と言われた。



○レストランから外に出ると、民家の庭々に蓮霧の木があり、実っているのに気付くのだった。この景色がととてもうれしかった。

○今では、日本に輸入されているようです。産地でいただくのが一番美味しいのだけれど探してみよう。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。